

緊急住宅会議 第6回会議 議事録

日 時：2014年6月13日 19:00～21:00 場 所：内野設計万代町事務所

●前回の議事録確認

●内閣府 被災者の住まいの確保策検討ワーキンググループ資料抜粋（資料1）

自然災害による生活再建の全体像／住家被害と応急仮設住宅供給戸数／応急仮設住宅の建設コスト／東日本大震災における応急仮設住宅の推移（入居）／応急仮設住宅の仕様の見直しに係る要望事項の例／応急仮設住宅のハード面における追加工事等／応急仮設住宅の有効利用の例／住宅の応急修理の概要／被災者生活再建支援制度の概要／被災者生活再建支援制度の概要など

●「緊急住宅の全体像」（資料2）

プレ協、全木協、徳島型、三つの建設型応急仮設住宅周辺の概要。材の供給の配分、配置計画の重要性、地域間支援他、今後緊急住宅会議で検討していきたい内容のまとめ。まずは個体としての徳島型緊急住宅と、最小単位として各戸の関係性をつめて、大きな配置計画へ広げる。徳島型で考えたことを全木協やプレ協と共有し、よりよく。

●三つの取組み

① 地籍事前整理

② すまいの相談窓口準備

③ 徳島型仮設住宅整備

備蓄

- ・オイルショック後、木材備蓄機構が存在した。検査時に備蓄が確認できればよかったので実効性は低く、自然乾燥につながる制度でもなかった。
- ・管理の方法が重要。乾燥して、よりよい材になるという付加価値を。
- ・雨にぬれて乾くときに自由水も抜ける・・・わかってないとできない。
- ・場所代と金利が問題。場所は、屋根があればよい。金利は公的に補助できれば。
- ・各々の製材所などで少しずつ保管する。
- ・高温セットで表面乾燥してから天然乾燥へ→カビが生えにくくなる。
- ・人工乾燥してから保管、天然乾燥の二段階とするのが現実的か。
- ・ただし、硬くて手加工しにくくなる。機械加工向け。
- ・一年間ためて、以降、オーバーフロー分を使っていく。
- ・製材したものを備蓄し、使う際に加工する。
- ・多く使われる部材を想定する？柱材だけ備蓄しておけば建設できる構法の開発を。
「四寸角の家」応急仮設住宅にも、恒久住宅にも、大空間を必要としない公共建築にも。
- ・スピードが重要。複雑な仕口→シンプルに。金物併用。

・県内の住宅着工件数は3～4000戸。

・新建材の家 0.5 m³/坪、在来構法 1 m³/坪、板倉構法 2 m³/坪、ログハウス 3 m³/坪

- ・ 在来構法 30 坪の家→30 m³/戸 3000 棟として 9 万 m³
- ・ 建築用の木材生産量は立木で 40 万 m³、製材して 20 万 m³。
- ・ 応急仮設住宅一棟 10 坪/戸→原木 20 m³/戸。
- ・ 間伐 1 ha で 40 m³→応急仮設住宅 2 棟分
- ・ 皆伐 1 ha で 400 m³→応急仮設住宅 20 棟分
- ・ 建設型応急仮設住宅が 5 万戸必要？ 20 m³/戸×50,000=100 万 m³必要・・・
- ・ 木材以外の建材、設備機器についても各業界との連携を確認しておきたい。
- ・ UB など「仮設住宅専用型」ではかえって間に合わない。平時に流通量の多い型で検討。
- ・ 東日本では UB が間に合わず、床と浴槽を一体に FRP で作った例もある。
- ・ 温暖な徳島、各戸はシャワーブース、共同浴場を別棟で建設。共用することでコストを削減し、同時に和気藹々とした被災者同士の連帯につなげる。

●その他

- ・ 景観を台無しにしかねない「メガソーラー」を、被災時に有効に機能する屋根にできないか。パネルの下に応急仮設住宅をインフィルするイメージ。それを前提とした架台を建設するなら公的補助が出る、など。
- ・ 避難タワーに機能を持たせる。シイタケ栽培など、生産の場所に。
- ・ 公共建築物に浴室を設置しておく、など、防災施設を標準仕様とする。

●本日のまとめ～次回へ

- ・ 緊急住宅単体を、設備の汎用性まで含めて突き詰めていく（鳥羽）
- ・ 配置計画と、仮設村全体としての機能を一緒に考える（内野）
- ・ メガソーラーの活用を考える（松田）
- ・ 立木ドナー制度を考える

次回、7月18日（金） 18：00～20：00 @内野設計万代事務所
20：00～ 暑気払い@ビアガーデン